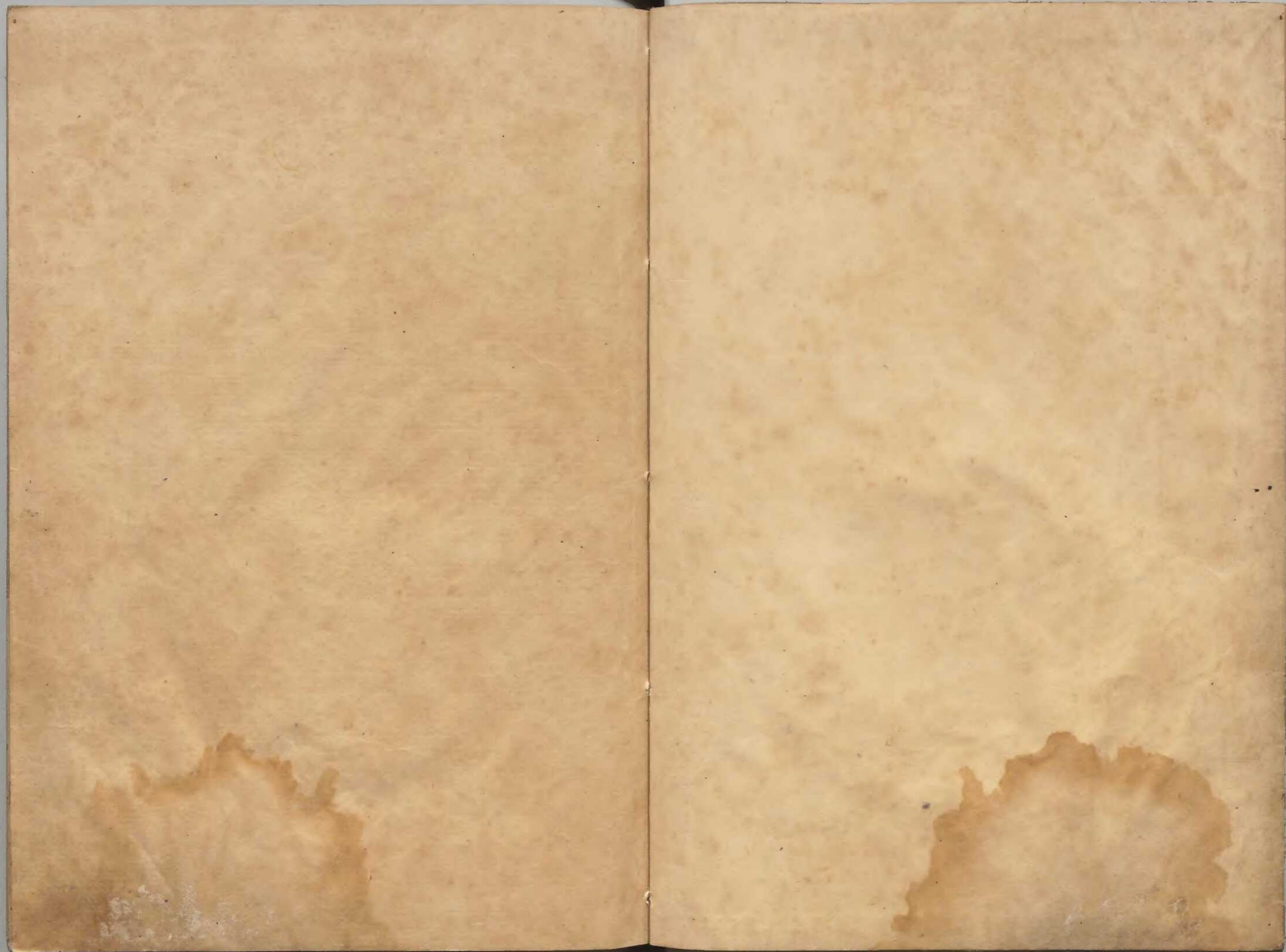


寛永諸家譜

平氏十九冊之内
良文流

内閣文庫	
番號	和 20199
冊數	186(73)
函號	神 76 1





遠藤

秋浦

作久間

秩父

寛永諸家系圖傳

平氏

良文流

遠藤

常胤

千系介

建仁元年八十有歳ありて死す

淺草文庫

胤頼たのり

東六郎とうの

重胤しげのり

東太史とうのたみ

胤行たのゆき

素還法師そまへんぼうし

行胤ゆきのり

時常ときつね

氏村うぢむら

常顯つねあき

師氏しうぢ

素明法師そめいぼうし

氏教うぢのう

常縁とこ

東下野守とうのまのり

濃列郡上郡山田の庄八幡と濃列郡上郡山田の庄八幡と

法名素傳ほなまそでん

常庵和尚とこあんがうしやう

本地寺ほんぢてら

教しやう

素純法師そじゆんぽうし

东宮内少輔とうぐうないしやうぼう

元胤もとむね

常和とこわ

素景法師そけいぽうし

常慶とこけい

東下野守とうのまのり

尚胤しやうむね

素山そさん

东下總守とうのまのり

素昌院そしやういん

胤縁

彦友新共米尉

胤基

彦友大隅守

文禄二年朝鮮陣よとひく病死

胤直

彦友小八郎

彦友五年因ヶ原陣のよきと方よ

属と

盛教

彦友六郎左衛門尉

彦友彦友新共米尉胤好が子なり常

慶が晴し彦友と彦友く其家督は継

しむ

慶隆

左馬助 生國英徳那と那

安長九年 授上佐下と叙一 但馬守

一 但馬

同五年 関ヶ原よとのひく戦功と拙つ

東照大権現その忠節を磨き一 徳

て中佐那と那を業塩一 忠清感

書成守多ふと家一 小いしく

茂濃出く内那と那今度く為忠

節一 忠をく 忠の全りも知行の

未細全衆は中一 忠中出とく 徳

安長五年

八月廿日

家康御判

重友たる助友

又同那八幡橋系右京亮居城とせあはこ

がもくをうら屋がり 歎乃首 叔多うら

少り之は城申より人質と申し
 和談と申す慶隆兵と引く御り
 上箇根城とせぬ事友小八郎遊電
 台座院殿其の戦功と称す
 御感書とたふ其写し
 能礼く旨披見申す
 出雲守と相談去報り
 揃兼右京居城八幡夜に然外曲端
 進押破敵数多し付指しと程く

慈印中付人質と相下し
 城に相談是又相説り
 主江形殿在は御又示表付し
 是乃と海信州下御務と
 兼控と表す申談山と程く

九月十三日
 秀忠御判

事友なる助也

寛永九年二月廿七日病死歳八十三

法名宗性

女子

前金藏おんまもる書

女子

孝友小八郎お書

女子

三木右をたお書

慶勝

遠友長門書

元和元年大坂陣小信お書

死二十八歳

慶利

遠友佃馬書 生國徳列那と那八懐

三木右をたお書 直徳お書

慶勝お書 慶澄お書 子なり 外孫慶利

とてお書 慶利お書

寛永二年よむ位ご之の位の下げ小叙せうじゆ一い通とほるる也なり

家乃紋けのゐ龜甲かめがら

三本

直頼

前納弾の團司三本大和智の友原氏より

良頼

同右兵衛尉

法名雲山

有あり總そう

同おな姉ね小こ詔みこと大だい納のう言ごん

天あま正ただ十じゅう五ご年ねん京きやう都と少すく病びやう死し歲さい四し十じゅう八はち
法はう名な体たい安あん

直ちき總そう

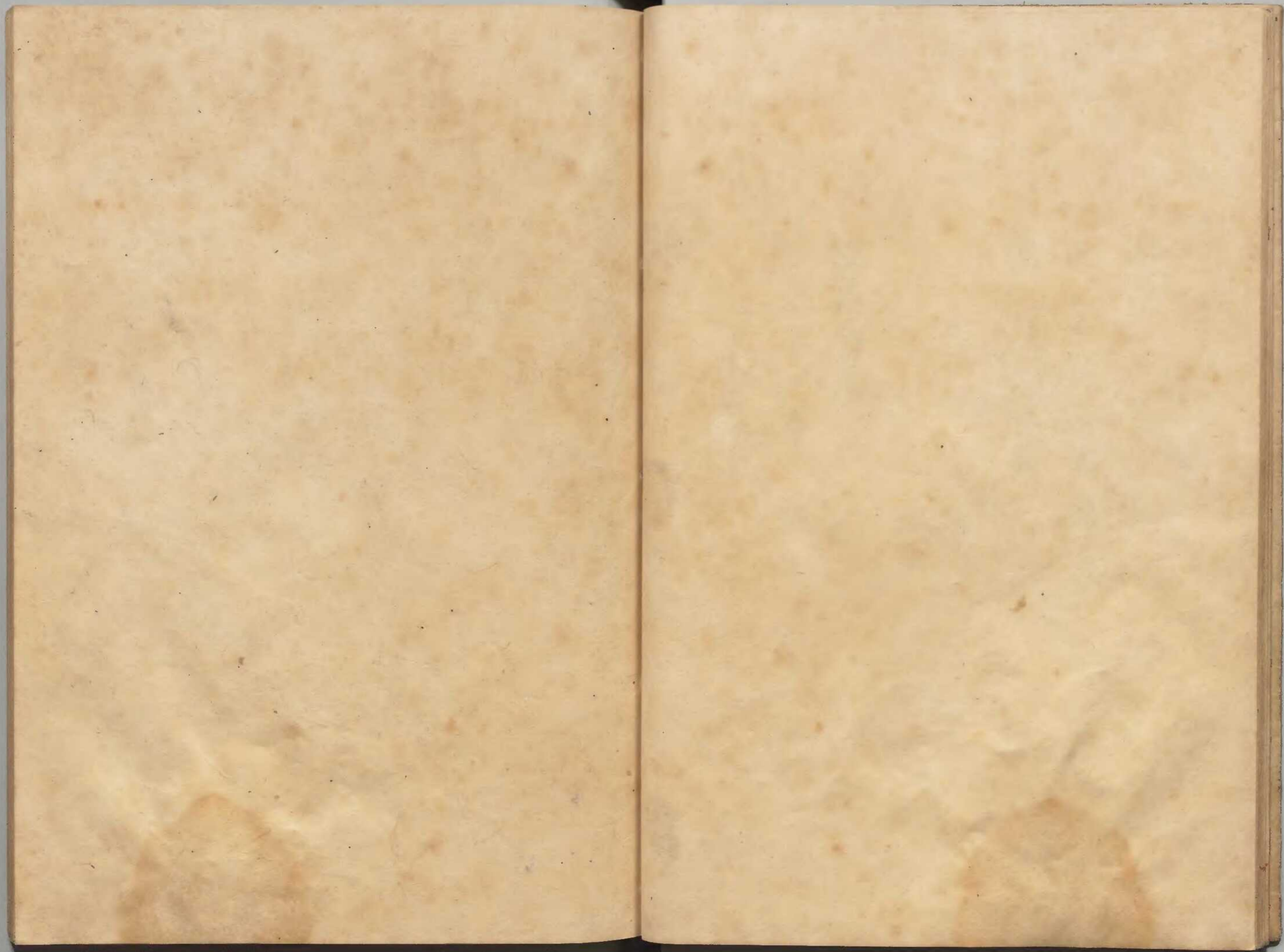
三さん本ぼん右う近えん大のだ痛いた

交まじ者もの十じゅう四し年ねん尾び切きりりりてて病びやう死し
とと一いち十じゅう四し

慶けい利り

但たに馬ま守しゅ

家け乃の紋もん 叙ぎょ美み



義盛よしもり

和田わだ右衛門尉ゑん

建曆けんりき年中なかつ滅亡めつたう

義宗よしむね

松平まつだいら右衛門尉ゑん

松浦まつら

義國

松平八郎

父義盛滅亡のとき舊地を去り河内
にありて塾居とけいん之角松平
字と稱く松浦と稱と

け同中絶

政重

八郎五郎

義國八世の孫

延徳年中之列りありて松浦と

稱と

信忠よりけいふよりけい

政次

大八郎五郎

信忠よりけいふ

清康君は仕(事)之列

六名の内久右よとひて服従とた

右貞

八郎五郎

清康君 廣忠卿と云

大権現より清く重くすべし

永祿六年乙卯和蘭ふとひく一向宗

一揆のとき右貞和蘭よりあつて

軍忠と云げまを

勝右

八郎五郎

勝次

八郎五郎

父乃忠政と相伝

龜院殿より清く重くすべし

重揚しげりょう

八重更

寛永七年より

將軍家より信長公より

同八年より大津島に

同九年新地を

台久たいきゅう

台久

時勝ときかつ

友次郎

廣忠卿と

大権現より信長公より

乃ら信長公より信長公より

由一庇教箇下

天正年中石川伯耆守

よりと方より

城裏乃もの意より

はく時勝ときかつらく乞こにたむじき城しろ中なかを
みゆるときは伯耆ほうぎののに城しろ中なか
ををおぼふおぼるるれれ雅みやび兵へい法ほう具ぐととらめ
ええくくのの城しろととままににおおままよよららと
て小田原おだわら陣じんののときとき中なか多た作さくななるる
ととりりくく時勝ときかつらくくせせくくとと思おもひひしし
城しろののああちちととははととむむじじけけいいくく二に月げつ言ご
攻こう城しろくくととひひくく病びょう死し歳さい六む十じゅう六ろく

別勝べつかつら

坂下郎

大権現おほいけんくくははくくととままにに園えん東とう法ほう
入いりままののときとき疾はやああららととりりくく法ほうをを
せせとと聖せい年ねんおおれれよよととむむじじくくここらら
ゆゆはは江戸えど陣じん城しろ富とみ吉きち見みのの丸まるくく
ととひひくくああちちああととははととららめめ
寛永十五年三月八日くわんえいじゅうごねんしがつはちにち病びょう死し

歳七十九

為勝たあ

半左衛門

寛永十六年十一月十日

將軍家を御し之り御し之り御し之り

同十七年十一月二十九日會福を

たきふ

吉成よしなり

吉十郎 吉右衛門

大権現を御し之り御し之り御し之り

長長を御し之り御し之り御し之り

同年同原原陣陣御し之り御し之り

御し之り御し之り

同十九年元和元元大坂大坂陣陣御し之り

御し之り

元和二年

台徳院殿より清くそとくまひり
寛永十年

將軍家より修徳とくそとくあり
都合六百名余と修徳

同十二年五月十二日病死七十歳

台正

長考 長たぬ

大権現

台徳院殿より清くそとくまひり

大坂あ度の陣陣と修徳

寛永九年より

將軍家より清くそとくまひり

同十二年 約命ふらそとく家督と

修徳と清くそとくまひり

同十七年 ね得せよらわて奥方

の陣と清くそとくまひり

同十九年二月六日修徳とくそとく

後り部八百石余と伝ふ

吉勝

吉十郎

正勝

傳之丞

正成

源氏部

生國後

將軍部一信之丞

勝吉

源氏部 生國後河

元和九年十一月五日

將軍部一信之丞

吉景

源氏部

親貞

源市郎

信康君 廣忠卿より仕へ奉りて

軍功を上げ奉りて

天文十一年十月廿二日冬別野田

よりとひく討死す 乙子丑

久勝

惣左衛門

弱年より

大権現より侍りて

天正二年幸別大井合戦より先

鋒とのぞみあひ大久保七郎右衛門

より一軍功を上げ奉りて 祇敷

箇取の事なり

同二年長篠合戦より侍り

同十八年小田原陣より侍り

侍りて

安長五年 美田河津陣此とき久保
相換ありし一属一市陣とお換あり
勝河一旗も討となしし久勝
先よ進急し一城とてし時にお換
ありと収く引ありとげこふ久勝
同と相換ありしけ事を
台徳院殿此上同し進とありし
のりく同年九月七日自教と歳
六十二 信名音吉

久成ひさなり

平定

大権現し一信くそしきし
天正二年八月幸列高天神乃城を
せしりも此久成久保七郎右衛門
一属一柵の四よとひく首級を討り
同十八年小田原河津陣よ信吉
安長五年 美田河津陣よ父ことも

よ市陣よちじんと父ちち自教じけうののち後あき久保くわののち頃ころに
生なず

寛永十八年五月十日に病死

勝吉かつきち

平太夫

久真ひさまこと

十三年

父長也年父久猪ちちひさぶた死去しよきののちら返かへり

小田原おだわらに居まゐり

同十九年大坂陣おさかじん取とりしとひひる

市ちにまり

大権現おほいけんをまり

元和元年大坂陣おさかじんにまり

同二年どうににまり

台徳院たいとくゐん殿のりにまり

の役やくとしる

寛永九年かんえいくわんにまり

將軍家より信之人を以て其の海

同十年二月信之とて海軍

同十七年沖具足奉納となり同心

十人を以て

久元

惣在事

水戸黄門頼房卿より信之

寛永十七年十一月廿日病死

久幸

長共事

寛永八年

台徳院殿と稱し

同九年より

將軍家より信之人を以て其の海

毒と信之

同十年信之をたも

某

市井

親次

一高

長尾

廣忠

卿

大権現

よびしるすもくもくもく弱年を

志んくも陣しん軍功を上げ

ます

元龜元年姉川合戦しん首

級を得しん

同二年十二月廿二日三方原しん

祓と象類

天正二年五月廿一日長篠しん

合戦のしん首級を得しん

元和四年九月十九日小病死しん

八十二 法名正賢

志綱

孫長

小系氏政しげのちかよりしげのちか

長十年八月十七日しげのちかよりしげのちか

よりしげのちかよりしげのちか

親正

孫一郎

大権現おほごんげんよりおほごんげん

台徳院殿たいとくゑんよりたいとくゑん

天正十二年てんしゅうじふにねん長久ながひさよりながひさ

長五年ながごねん野分のり宇都宮うつのみや濃州のうしゅう関原せきはら

両河津りやうわづよりりやうわづ

同九年どうくわねん四十一歳しじゅういちさいよりしじゅういちさい

親勝

孫一郎しんいちろうよりしんいちろう

台徳院殿たいとくゑんよりたいとくゑん

將軍家より信之をよそへて

親剛

孫一郎 生國長

寛永八年

將軍家より信之をよそへて

親友

松平忠

親久

虎之助

重次

孫又左衛門

大権現より信之をよそへて

寛永十八年 約命より

紀伊西相持宣卿より信之

寛永八年七月十七日

しゝく病死

貴次 たうじ

源五郎忠房

正友 ただとも

一十郎

越後守 えちごのまもり

因就丸 いんじゅうまる

恒五郎下 とこごろうかた

文祿二年

大権現を扱へりしとてしる

安永三年秀吉逝去乃とき

大権現伏見へりしとてしる

久しとてしる

同五年野村小山法師の傳

同年石田三成叛逆のころに

大権現と首りしを發へりしとてしる

正友の傳

同十九年大坂法師の傳

しる

元和元年大坂法師の傳

同心五十人と形家正友世よく射り
しつくなむ且相列よとひく形地
六百石とすふ

元和二年より

台徳院殿よりしつくとすくまひり夜

形地くまひり形之子に百石とす

寛永三年後位下よ叙一越後守

一任

同九年より

將軍家よりしつくとすくまひり

同十二年江戸沖城留守の役とす

と力十騎歩行同心五十人とあひり

同十九年二月日形地とす

りり都六子石とす

親後

忠孝節 忠孝節 生國を

慶長七年より

台漣院殿より清くまゝくまひり

同九年^{寛永}成代とす

同十八年^{元禄}全派^{せんぱい}市細^{いちほ}の^ふ手^て引^ひこなる

沖^{おき}と海^{うみ}ありひい^い山^{やま}智^ち将^{しょう}乃^のとき^{とき}あも

此^{こゝ}役^{やく}とほ^ほるめ^め沖^{おき}勝^{かつ}内^{うち}茶^ち入^{いれ}掛^{かけ}相^{あひ}

環^{わん}賣^{ばい}号^{ごう}と形^{かたち}

元和五年^{元禄}成代とすくまひり都^{みやこ}

五^ご百^{ひゃく}石^{いし}と成^{なり}

寛永九年^{元禄}より

將軍家より清くまゝくまひり

成^{なり}

右^{みぎ}太^{たい}郎^{らう} 生^{なま}國^{くに}長^{なが}茂^{しげ}

元和三年^{元禄}より

將軍家より清くまゝくまひり

台^{たい}

派^{はい}兵^{へい}米^{まい}

正綱

一十郎

實^{ざう}を^たた^まふ^の親^{ちか}後^ごが^し男^{おとこ}

寛永元年

台^{たい}漣^{れん}院^{いん}殿^{でん}と^おね^いし^まく^まり^の親^{ちか}

同年より

將軍^{しやうぐん}あ^りし^はく^んを^しり^しる^に

同七年より^こゆ^りし^はく^んの^むす^ねを^しり^しる^に

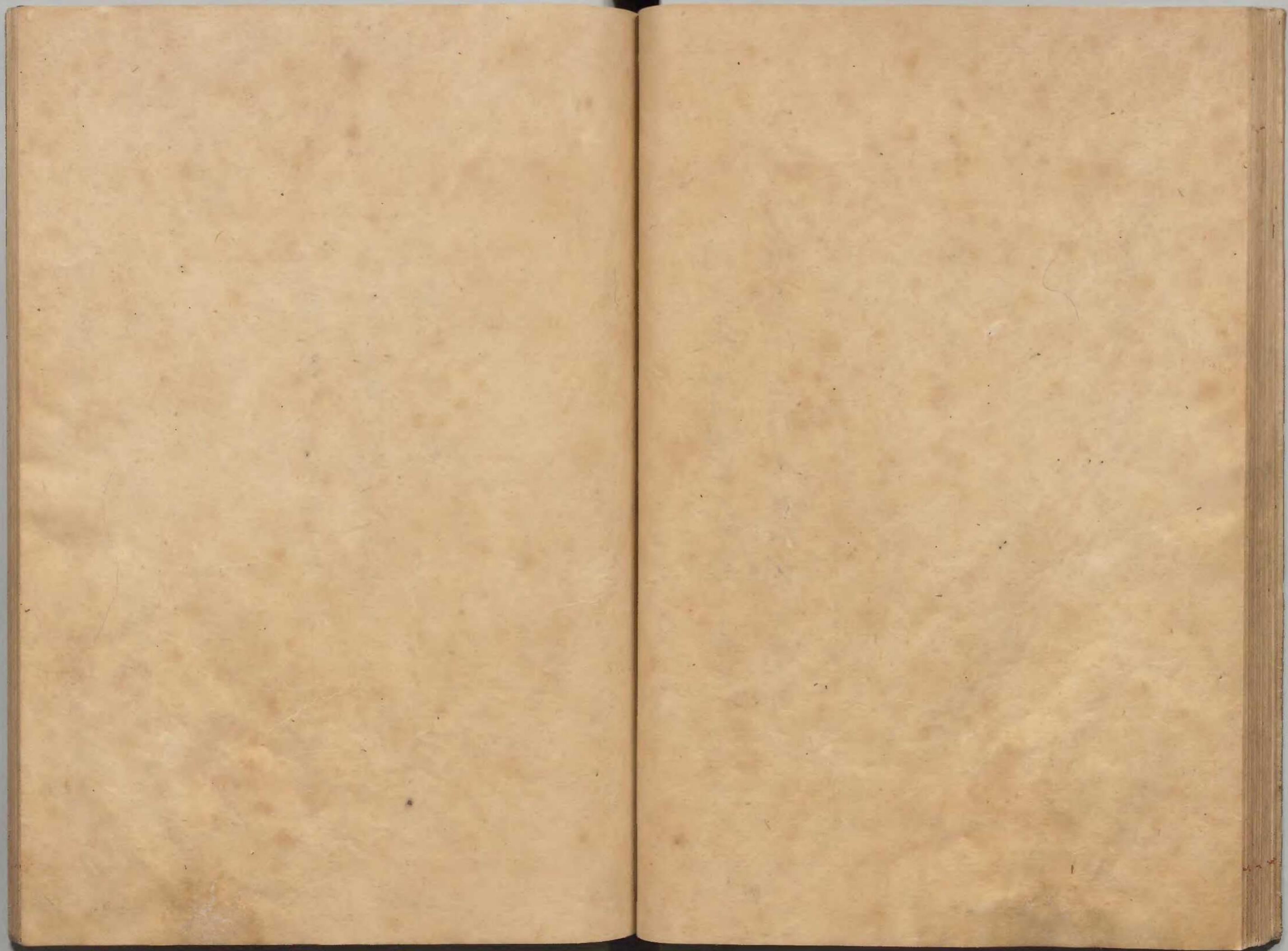
某

熊^{くま}之^の助^{すけ}

同九年^{しゅうねん}神^{かみ}切^{きり}末^{すえ}と^たま^ふ

同十年^{じゅうねん}二^に月^{げつ}七^{しち}日^{にち}修^{しゆ}治^ちと^しり^しる^に

家^{いへ}之^の紋^{もん} 圖^ず内^{うち}之^の引^{ひき}



● 感次

作久間

先祖之流乃一族なり源頼朝乃
とき房の作久間と名を冠す
氏とて之を苗裔尾列に後居と

久六郎

久右衛門

生國尾流也

織田信長那款と証せんとの進發の

さきおこしりてさうひま功とぬきん
比大坂の城とせじ新少子威次安政
父子向城穢多漸よありて日取軍
功をけくと 法名普金道号剛岳

威政

理助 玄蕃元 生國尾治
信長より信入居戦志とぬきんで
漸良名とありてが城半國成候

全澤城より居候と

天正十一年外舅富田勝家と大将と
志く才安政こりに江川梁漸の
城成せめ候も中川漸吉米尉と
と翌日勝家秀吉と合戦一利あり
すく加列よ返く時威政不幸に
志く生捕よせり候

同年丑月十二日秀吉れりありて
法名普俊道号英伯

女子

中川修理左衛門尉 内膳正母

安政

久六郎 久右衛門尉 後五位下 牛園回お
係田左助 養子と成りしとてめハ
係田久六と号し
た助 紀列 係田若とて河列 錦那と

久と十六歳のときとてめく 河列 後
貝殼塚よとてひく 津波あてせりわ
久乃とて教度軍功あり
天正十一年外甥勝おとりのく軍ね
こなり 河列 志津 嶽し たるふ味成
軍利あり 歩兵士とてめげらん
ことと安政馬とてり 魔とてり 士卒と
あて死戦とてげまとてこいしとて士卒
命はりらひとて遊り 敗小とて安政も

近く小庄乃城はたもえんとて秀吉
の軍兵先々城は度里かこじ安政
城に入事と得と志と志と志と
山林のくはくは勝家自殺の後紀伊
國一居と其後織田信雄秀吉と
あひたうとんとりとき安政
大権現の台命とつけとて信雄
乃令よ惣志とくまうに皆別おくの
軍ととてめんもは家りともひく

長久

意好の士卒及根来寺に流徒難破れ
況兵馬の率く河内四見山の城よ
楯藤秀吉の信泉河内和国の城主
中村式部少将に属推たうふ家り
とひく信雄より紀伊河内おまは
安政中成れ地と移ふと
大権現教度軍功あるは感ト好ひく
御内書はすもふ長久も合戦のら
秀吉と

大権現信雄と和睦し、
返さず勝之こと、
さ小糸氏政よほし、
是又長五年より

大権現よほし、
軍役をほし、
と討ちく、
て敵は、
がも討ち、

大坂陣のとき、
大坂陣のとき、

台徳院殿よ、
謀略の事、
翌年合戦の、
たほく討ち、
度く、
形と又信、
寛永元年、
卒と歳七十、

信と又信、
寛永元年、
卒と歳七十、

勝宗

久六郎 民部少輔 従五位下

生國相換小田原

大坂あ度沙陣、延和二年五月七日天

王寺表、とひく敵兵討獲

元和二年二月廿日江戸よとひく卒

歳二十八 法名宗見 道号 樵雲

安長

日向守 従五位下 生國氏流江戸

寛永五年安政が世に二万石と給ふ

同九年正月十二日江戸よとひく卒

歳二十二 法名宗光 道号 蓮雲

安次

之六郎 生國同家

安長が世に二万石と給ふ

寛永十五年九歳より死す
法名宗禪 道号徳用

勝政

軍田之は忠の尉 生國尾港宅智那
外男勝家養く子とて越前敦賀の
城より居住とて河州志津嶽よりとひく
討死歳二十七

勝之

作久右源六郎 大膳正俊正位下生國尾

越中の守護佐々木内務助源の成政養
子とてなりとてめは佐々木源といと号と
天正十年織田信忠信利より遠く城と
破仁科之命と誅と討り十五歳外
男侍家よりつりて先登一統
去の討揚子と戦功とぬきんづなり信
右感懐とて多ふ
志津嶽合戦よりとて養父成政よりと
ひ越中よりあり成政勝之とて

味山の城一居し

同十一年長尾景勝と率と志と越中

尾津北城の守りし一居し揚之成政

の守りし其の發く尾津の城と志とひ

大り敵乃共とやち且成政秀吉と

敵志と前田利家と越中頼のるよ

とひく挑戦ともき小勝之属軍功あり

秀吉越中進發の時よ志と成政

ぬ揚之一家れ敵るる成政と志と

ふきよ屬せ秀吉兄安政といそりに関東

ふたよしき成政一居し

天正十八年秀吉小田原の城とせし

き成政より安政勝之ありよ士率と屬

せしめ遊軍となりし一居し

かし成政自殺乃後敵乃寂りし

とも秀吉其の勇と行し

せ秀吉成政の先よ

乃志にくんり成政一居し

ひふかき軍志を以て氏卿卒
志く後秀吉之功を賞して河川
小川よとひく七千石と安政一なる
同山海よとひく三子石は勝之
手ぬり系

安長五年長尾景勝謀叛の時因東よ
たじき野川小山沙陣一り志
ひきくも川石田治部少将反逆時
急よ上流一り書子瓜原物とる

よ上意より川にり我あり
て上流せど安よとひく使と河川の
成代も居れ者よはつていづく仇
り我書子瓜原とせハ世先ふ道
をころも一りいひとる我能ハ

大権現一り信守一関ヶ原よなりしき歌
陣よ池より兵士は討捕

月十五年常列小糸よとひく三子石
とくくもるり後五位下よ叙と

大坂冬陣のとき信長と

月夏陣よまこ信長一五月七日天

王寺表一とひく竹田水懸と討

まおお志さうふ者行月く首級とえり

信長とくく信州長治とひ

江川高橋一とひく一八千石と取

寛永十一年後府乃城高橋信と

同年十一月十二日後府よとひく率と

歳六十七 信長正安 道号泰山

勝年

左兵衛尉 信濃守 周備守 坂本下

生國相換小田原

伏見一とひく

大権現一揚一とひく

長十三年

台徳院殿一とひく

あ度沙陣一とひく 五月七日天王

表おもしひくく甲士二人と討うちます
元和二年従五位下しり叙なじめす

寛永七年九月廿八日江戸よしひく
卒すと歳とし四十一 法名玄決 道号閑叟

勝かつ感かん

源六郎 生國武藏江戸

寛永九年九歳少く

將軍家しりり賜たまはりて

勝かつ友とも

月十二年勝かつ之のがまはり乃の因よにし石いと
たまふ

苑人 生國武藏江戸

寛永四年十二歳少く

將軍家しりり賜たまはりて

月十二年勝かつ之のがまはり乃の因よにし石いと

勝豊

檀之助 生國同前

寛永十六年

將軍家よまみえをくまひり

家乃紋 丸の内之川 九曜

作久間

元久二年實朝作久るを即ち

畠山重忠討つしり時重忠が子

重保漁倉よりあり作久る先おれを

討揚其苗裔尾張よりうけり居

五三取乃城主こなりお乃ゆへり

末葉おがしとくゆへを實勝おれ

が備あなり

与六郎 生國尾港
上野下之城主なる信長より信長
安土乃城を造り又永原と城を
造る

政實

河内守 生國尾前

秀吉より信長に豊後の姓を賜ふ
安長二年九月六日信長に下り
河内守より信長に
普請奉行を命じ伏見の所を造ると
なりお造りしに
大権現小山沙陣よりひ岡ヶ原沙陣よ
り

元和二年十一月七日卒に歳又十六

實勝まこと

伊豫守いよのまもり

河内守かんののまもり

将監しょうげん

生國守なみのり

幼年わらわ

大権現おほごんげんより

安永九年六月二十二日よねのこ後のち任下にきり

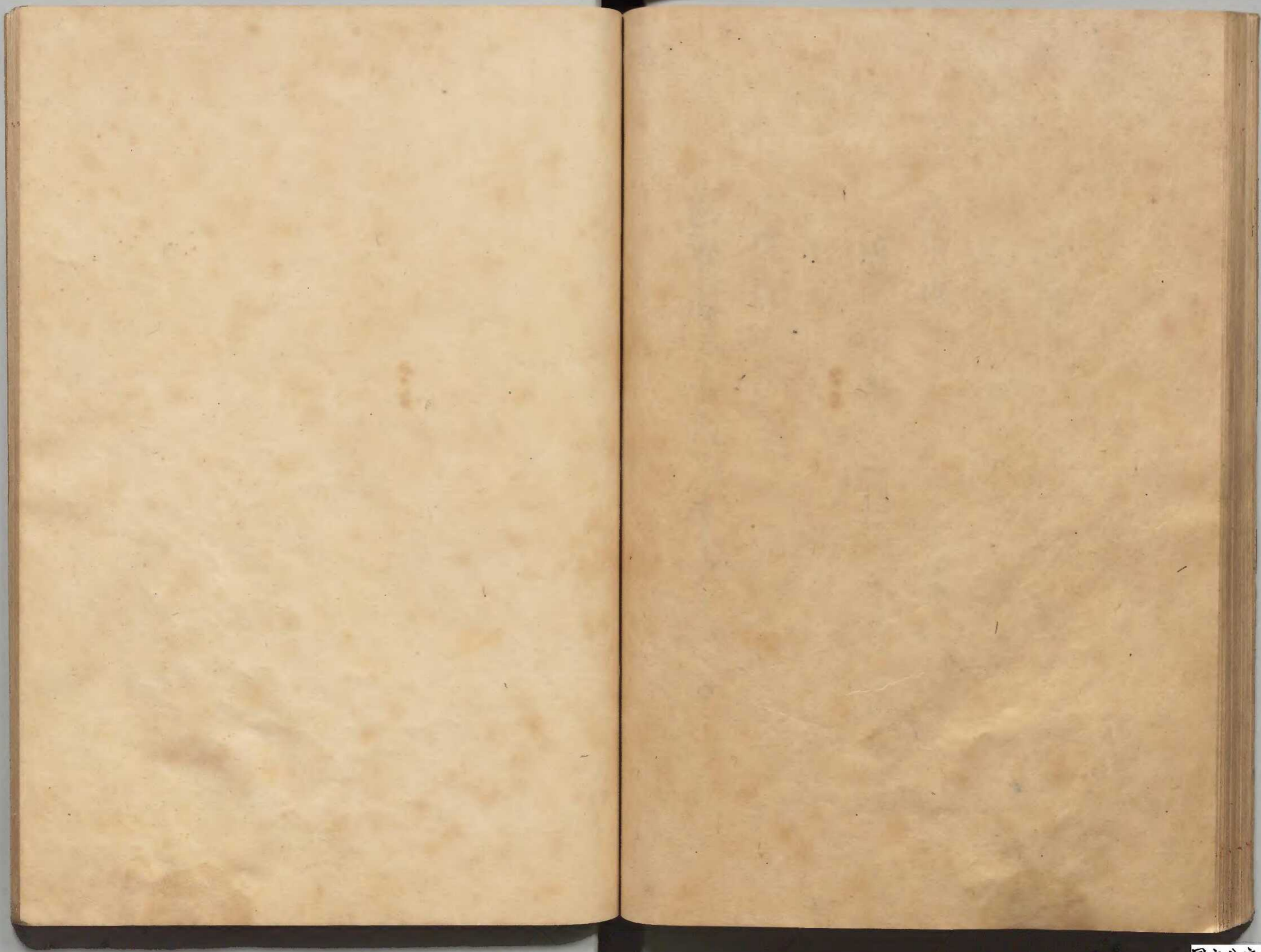
叙ぎよと

大権現おほごんげん荒沖あらいそのり

台座たいざ院いん殿どのとよび

將軍しやうぐん家けより

家乃紋けののゐ園内のち之の川がわ



佐久間さくま

信晴のぶはる

戸部とほ尉じ 生田尾おくら港り末すえ張はり

信盛のぶもり

右衛門尉ゑもんじ 生田おくら同どう前まへ
織田おだ信長のぶなが一ひと行ゆきふ

永禄三年今川義元尾刈り市法と
信長よりてと普照寺より嘆ふ爰よ
とひく義元丸根籠津二ヶ取乃と
をせめ危がり信長普照寺山の守り市
とせんとと信感池じひ合戦義元
乃兵二百許討捕討り信長清洲より
池来義元と討捕
同三年信長加苗義軍河内其陣
河内浅香大河内陣為よ先鋒とて

戦功あり

信感河内永原の城と守はとき作ら
義頼野河内市法と爰よとひく
信感とひひ正勝とせじひあむたひ
れ河内首級とゆり
元龜元年師川合戦のとき信感父子
永原の城よりありて度中郡へ御市
浅井ゆあも長政が汽黨ゆ吹新なる
とよひ久徳小川山崎等と討つ皆降参

せし信長は別新村船江大津久手
取の城とせし給とき信盛先津し
たゆく首級とゆへ
月二年信長は鶴一揆と討とき教度先
津し西別取の要害とせめおし
香江口松木川と渡し一揆多討揚し
中江乃要害はせめおしと
長篠合戦越前陣難攻陣ふよと
皆軍功あり

天正五年松永陣正久秀孫叛の時信盛
恒吉し市陣と久秀和列志を城より
使者大坂の一向宗と信長し加防と清
使者俄し二心あり久秀が叛逆は
信長は信く安よとひく信盛大坂
の助勢は号しし使者と先しし
志貴の城二丸とせめしり僅よ中城斗
よ取つじら安ししとひく使者と京都
に信長し時し城を信忠池原久秀と

せめ自殺せし

同十年正月戸津川よきひく死と歳
み十九

信原

左京亮 生國同あ

永祿三年信長義元と合戦乃とき

普照寺山よりよひく軍功あり

天正十二年信雄秀吉と合戦あり

信雄正勝として堺別表のあせし

け時正勝蟹江の城主より前田与十郎

よよひ信原と志く蟹江に城のあせ

せしお国二心ありく流川たを

よび九鬼大隅と国懸し城の中

入信原城中よありし少くもあせ

今も術なりく勢を中城よは火

とらかり正勝が妻よひこり

自殺せんす歎こよひあせし

尾道なる筑城なるわらわら一人質を
信厚一あつて城を去りせんあは
あつてあつてあつて二男と質と家
とひく信厚正勝が妻子一人質の相
いそりいそりあつて

大権現信雄と蟹江よ市陣志くあつて
と圍せめ給ふ流川よび九鬼あつて
ことあつていそりいそりあつてあつて
と首領あつていそりあつて

大権現信厚が節義と感一給ひあつて
いそりあつていそりあつて

大権現よ湯見一あつていそりあつて
江戸の津城 渡津のら柳京武都春
信厚と一館林の城一あつていそりあつて
あつてあつてあつてあつてあつて

大権現よいそりあつていそりあつて
信厚が治藏と子信好一あつていそりあつて
信厚館林の城と守

安長元年十一月館林たかねよりとひく
死に歳六十二法名久保きく

信好のぶよし

藤田郎 生國同前

大権現おほごんげんよりとひ

台徳院殿より信よりとひ

安長二年十一月死に歳二十三

正勝のぶかつ

甚九郎 之河後河守 不干奇ふけん

生國同前

元龜元年げんき金崎陣きさきじんのとき正勝十五

歳より信長のぶながは法はふよりとひ

月年大坂一向宗おおいさかをせし時正勝のぶかつ先鋒せんぽう

となり野田福徳ののたふくとくよりとひく軍功ぐんこうあり

同三年信長の命よりとひく秀吉ひでよしより

屬一河別虎山乃其おは守く
軍功あり

天正元年義昭頼朝の櫓を信長
正勝は志く先鋒とす。一は安よ
とひく宇治川を渡り相討つ。是
すもの作久間浦おち梶川流之節
あましくはれ与力なり。節後より
その作久間櫓平に好く。又之節吉田
久正節寺西は素ふなり。義昭敗れ

とき正勝は志く小寺郷もく送之好
左京大夫小おはこと
天正四年一向宗落城乃とき正勝天正
寺勝鬘のころりては清丸く大坂にお
えとめり原田浦も本津の城をせめ
討死を時一揆勝鬘をわじ安よ
とひく信長京都より池原に攻め
信盛先鋒こがらしく信長より教と
正勝もろくに信長の旗はすむとんく

大権現より信をせしむるに不承
足跡の隠道と大坂陣のり

台徳院殿よりめいしき道常に後福
の席より列止

寛永八年正月江戸より死を蔵
七十六 法名宗若

信實

新十郎 生國同あ

兄正勝嗣子なり取し書く子と
あはまきつら けいこ ちんじん やま

大権現関ヶ原陣よりしき信

寛永九年千石の地所相伝とあり

よわこのこ

台徳院殿より信をせしむるに

元和六年七月八日江戸より死を
死をせしむるに十八

定良

宇右衛門 生國友亮

元和六年

台座院殿より湯見一

うわ沖毒飯信

同九年うわ

將軍家より

信

信重

大京亮 大高宗光 生國後河

實ハ信厚の次男なりけり正勝養子と云

長長也年開ヶ原沖陣の時柳原武光

大捕が隊下りし

元和元年大坂沖陣の時

遠江も信下りし

六月乃朝飯坂口の敵本村長門同直斗

取給はしけり

池じつひは將として批我し一討し
をのち先もせじつひはきん
信重首級とゆり月七日天皇の
皇山石の上よとひく慶豊前
こおたつひ津のあもせ首級とゆ
り討しまもも家老伊友志
及古平十二人討死と

寛永七年二月十五日

將軍家御記

信後

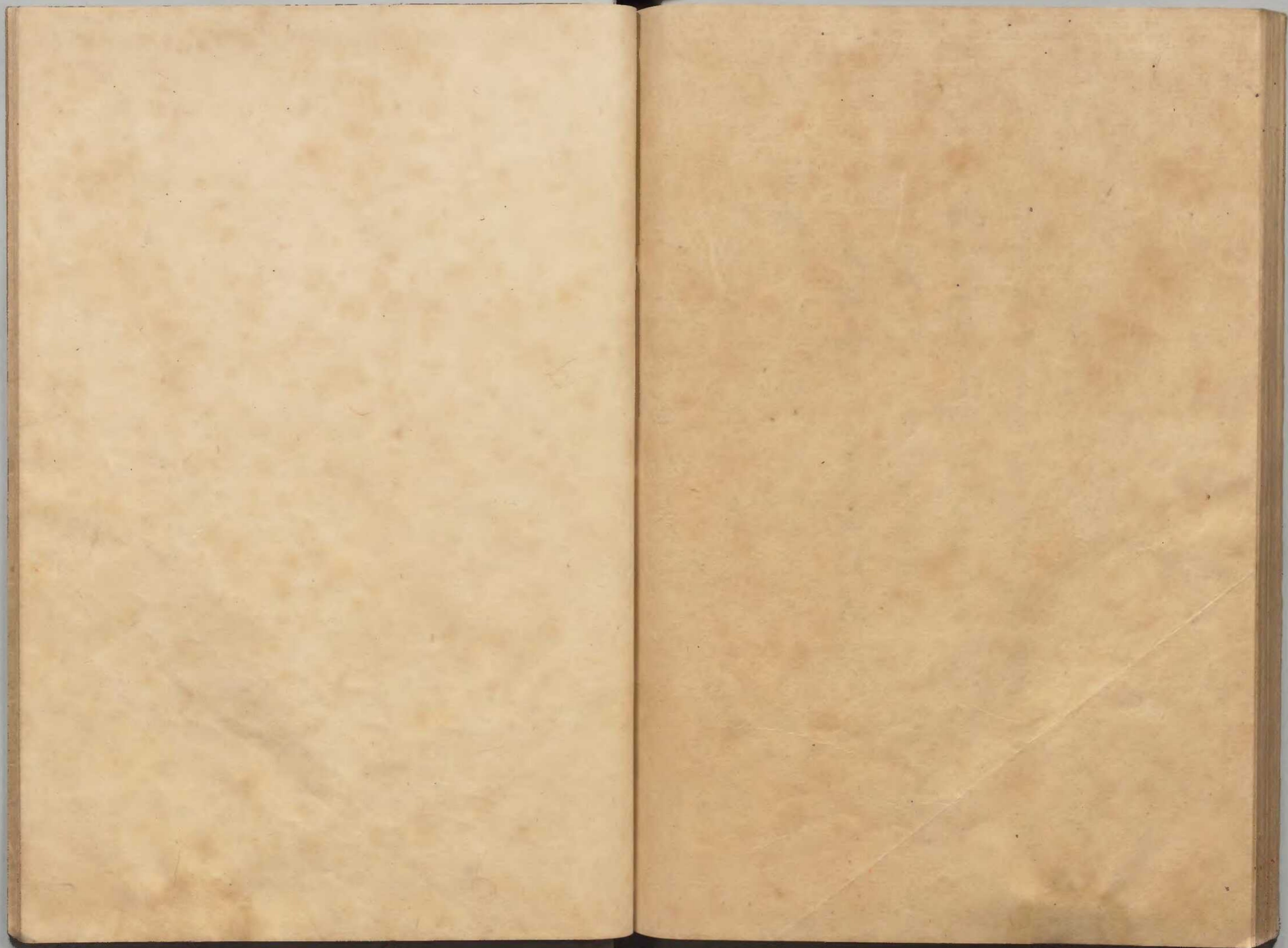
平田邸 生國上野館林

寛永十年二月廿日

將軍家御記

月十二年六月廿日津島館林

家乃紋丸の周之川



秩父ちちぶ

● 経春けいしゆ

六郎

宗能むねのう

大五丸おほいまる

父ちち 經春けいしゆ が 形かたち 代しろ ね 遠とほ 所ところ 宗能むねのう の 子こ 守まも 育やしな

建長二年二月一日為氏此判形也

あり

信清

信王丸

能行

六師在東門

康暦元年十一月十五日父此後狀也

あり

行宗

次郎

法名玄請

家周

大炊助

童名新法師

建永三年八月此禮文也

某

縁左郎

行家ゆきか

右京亮うきやうのせいりやう

繁与

享徳六年五月十五日たかひら院文いんぶん之始也

憲周けんしゅう

重次しげつぎ

助之郎

右兵衛督

重信しげのぶ

又六郎

法名宗美しやうみ

重圓しげのゑん

孫次郎

先祖せんぞより代々よつぎ秩父ちちぶと伝つたふ

天正十八年てんしやう小田原おだわら没落ぼつらくすたち秩父ちちぶと云いふ

く浪人なみのりとなり

寛永七年十一月六日かんやう病死びやうし歳七十七

法名宗平しやうへい

女子

右御門依

幼少あり

東御門院より修ふまじり

重能

彦若衆

母は長田長馬助の女

大権現元來祖父重信とありしは是と

約縁ふこまじり重信既して死にあり

お福一をまじりしはすま後今川氏より

此婿判髪して貞春と号す

大権現の御命よりありしは崇源院殿より

修ふまじり

大権現重信の子孫と貞春よりせむ

貞長重信と好むは修ふまじり

祥よ言上とありしは修ふまじり

十三年重能八歳より

大権現のお福

台徳院殿より修ふまじり

月十五年 信のりせ 後河大納言

忠長卿あきらみかみより信のりふ
元和六年忠長卿より甲列ふし仲郡ちゆうぐん二百

市場村いちばむらと信のりふ

寛永十九年より

將軍家より信のりふ
筋之吹村すぢのふきむら山高村やまたかむらと信のりふ

重之しげゆき

五郎分

家乃紋いへのみじん 小文村こぶんむら 濃

